

音楽界の孤峰、伊福部昭を育んだ北の森

伊福部昭（一九一四～二〇〇六年）



「リテラポブリ」とは、ラテン語で「ポブラの手紙」という意味です。北海道大学（及び、その前身である札幌農学校）にゆかりのある人々の言葉を、「リテラポブリ」としてお届けします。

現代人に現代の音楽をプロパガンダしなければ

でガリガリ弾いていたこともあった。」

『北海道大学交響楽団50年史』

（一九七三年三月、二五八ページ）

在学中に処女作「日本組曲」を作曲し、卒業した三五年にはオーケストラ曲「日本狂詩曲」でチェレピン賞を受賞して国際的に評価された。全くの独学で体得したその音楽は、土俗性・民族性に富んだ独創的なものだった。音楽の素地について伊福部は語っている。

▼「私の場合は、概して東北民謡でしよう。北海道に移住してきたのは東北出身の人が多くですから。小さい頃に彼らの民謡をずいぶん聴いたので、作曲時にそれをそのまま使うというところは避けていますが、根元に影響はあると思います。それともう一つ、アイヌの歌もよく聴いていました。親父の代行で種々の行事に呼ばれたりしていましたので……」

▼「アイヌというのは歌を歌う時に、各自が自由に節を変えます。いわゆる

即興音楽ですね。彼らにとって歌を作るといふのは当たり前のことです。そして、日常のどんなことにも歌が付いているんです。子供が生まれたときに歌い、そして家を建てた、家が焼けた、食事をする、酒を飲む、また、悲しいときも借金の催促でも、何でも歌にしてしまう。そういう光景に接しているうちに、彼らの様式が自然に体に染み着いたようです。そんなわけで、私自身も自分で音楽を作ることに抵抗はありませんでした。」

相良侑亮編『伊福部昭の宇宙』
一五〇～一五二ページ、一九九二年五月、音楽之友社

卒業論文「発音体トシテノ木材ノ個有振動及音響ノ伝導共鳴損率並ニ其応用」で林学実科を終え、四年間の厚岸森林事務所勤務を経て、伊福部は三九年に北大農学部附属演習林に勤めることとなった。戦争が深い影を落とし、国威高揚が声高に叫ばれた時代である。伊福部の民族色の濃い作風は注目された。四〇年、



1940年7月6日小樽新聞より抜粋

北海道庁と小樽新聞社が主催した「紀元二六〇〇年奉祝大聖火祭」のために「交響舞曲 越天楽」を作曲し、伊福部自らがタクトを取った。また陸軍の委嘱で作曲した「兵士の序楽」について回想している。

▼「北大の演習林事務所に勤務していた時分ですから、一九四三年以前の出来事でしょう。苦小牧の陸軍航空隊から隊歌の作曲を依頼されました。山田耕筈さんは、その種の歌なら一晩で一曲は作ってしまうとの評判でしたけれど、私はそうはいかないので、一週間の猶予を貰い、ようやく書き上げて送ったのです。すると、その直後のあ

ドシラ、ドシラ、ドシラソラシドシラ、……。高度経済成長期に少年時代を過ごした世代の体に染み付いたように響き続ける土俗的なメロデーと力強いリズム。「ゴジラのテーマ」である。映画「ゴジラ」の音楽で知られる伊福部昭（いふくべ あきら 一九一四～二〇〇六年）は、北海道音更で少年時代を過ごし、一九三三年に北海道帝国大学農学部林学実科に入学した。音楽に強い興味を持っていた伊福部は、北大の文武会管絃楽部に入部し、コンサートマスターを務めた。当時、文武会管絃楽部の中心メンバーであった菅孝男は回想している。

▼「工藤君はめきめきチェロの腕をあげ、伊福部（第一ヴァイオリン）、有田（第二ヴァイオリン）、小岩（ピオラ）とクワルテットを組織し、「新音楽連盟」の名のもとに近代音楽の連続公開演奏をきわめて意欲的にすすめた。これらの方々は、文武会オーケストラに所属していたので演奏会が近づく「応援」にきたが、ベーターペンの田園の嵐の場面などは、伊福部さんがひとり

目次

リテラポプリ 2

音楽界の孤峰、伊福部昭を育んだ北の森
大学文書館 井上 高聡

特集：北大は作物の病気と闘う 4

農学研究院 上田 一郎
増田 税
近藤 則夫
伴戸 久徳

北大施設探訪 15

北海道大学植物園
言語文化部 眞崎 睦子

知床学のすすめ⑧ 16

森と海のつながり
川のはたらきとその管理
農学研究院 中村 太士

もういちど北大と出会う—〈その八〉 18

もう一度北大で学ぶ
留学から大学院進学へ
学術国際部 留学生交流室
河野 公美

information 19

建築設計図が語る北大の歴史—〈第8回〉 20

正門
工学研究科 池上 重康



JASRAC 出 0609402-601

る日、何の予告もなしに、演習林事務所に兵隊がやって来て、いきなり私を捕まえ、札幌郊外の丘珠飛行場から輸送機に乗せて、苫小牧に連れて行ってしまった……。事情を尋ねますと、結局、この前作った歌の歌唱指導をやれということ、三時間ほど稽古をつけ、やっと帰されました。しかし、札幌の方では、伊福部は軍に強制連行された、きつと横文字を使って楽譜を書いているのを睨まれたんだという話が出た。来上がっており、家族は大騒ぎしているありさま……。万事が、こういう強引で乱暴な調子でした。

「伊福部昭の芸術3 舞踏音楽の世界」(KICCI77)、ライナーノート

西洋文化が冷視された戦時期、音楽アカデミズムや中央楽壇から遠く隔てられた北辺にあつて、伊福部は常に音楽を志していた。『北方文艺』第四輯(九四二年五月)には「現代音楽のプロパガンダ」を寄稿し、シエンベルク、ヴァレーズ、オネゲル、サティ、ヴィラロボス、ガーシュインといった西洋音楽の最新の動向について論じている。

終戦後、上京した伊福部は東京芸術大学で多くの優れた音楽家を育てた。また、時代や楽壇の潮流に流されることなく、真に独創的な作品を作り続けた。伊福部の音楽は、それを育んだ北辺の森林、北の文化都市札幌、北大の学生文化への最良の手紙と言える。

大学文書館 井上 高聡
Inoue Takahiro